



...and
ACTION!
★ ASIA ★



主催者：国際交流基金アジアセンター

ASIAcenter
JAPAN FOUNDATION

Contents

1	ごあいさつ
2	活動記録 #1 - #2
5	活動記録 #3 - #5
16	制作作品解説
19	REPORT 東南アジアでの映画制作体験をふりかえる
20	DISCUSSION 日本の映画教育現場から考える国際交流の役割
23	参加者一覧
26	アンケート結果

ごあいさつ

デジタルでの映像制作が主流となった今日、映像制作の裾野は広がり、世界各国で若い映画・映像制作者が多く輩出されています。またこれに伴って日本を含むアジアの国・地域においても海外映画祭への出品や国際共同企画などを意識して学ぶ者も増え、国際協働の可能性が広がりをを見せています。このような状況を背景にして国際交流基金アジアセンターは、日本を含むアジアの次世代を担う映画・映像専攻の学生による活発な対話や交流のプラットフォームを構築し、将来的な国際共同製作の可能性を導き出すことを目的として、2014年度に「...and Action! Asia-映画・映像専攻学生交流プログラム-」を開始しました。

2015年3月に日本映画大学と共催した初回は、日本・インドネシア・タイ・フィリピンから17名の大学生が集まり、各国の映画事情を学びあい、映画スタジオや映画祭への訪問を通じて日本特有の映画文化に触れました。続く第2回は、東京を舞台にした短編映画企画の取材調査とプレゼンテーション演習、映画分析などのグループワークを中心とした内容に移行。3回目以降は、フィリピン、日本、インドネシアと毎年実施地を替えて、4、5か国の学生と教員が集まり、約10日間の中で多国籍のグループワークによる短編映画制作を行い、完成作品の上映を通して現地の観客や映画人との交流を図ってきました。

この間、国内の映画分野における人材育成を取り巻く環境も大きく変わりました。日本に入ってくるアジア圏を中心とした外国人留学生の著しい増加によって、学生にとって国際交流はより身近なものとなり、グローバル企業による動画配信サービスやSNSの浸透拡大により映画・映像の表現ツールや鑑賞のかたちはさらに多様化しています。実際、本プログラムにおけるグループワークの中でも、学生たちが用途に応じて様々なアプリケーションを柔軟に駆使しながら自分の考えを伝え、他国の学生や教員の意見を取り入れながらビジョンを共有していく姿が印象的でした。

5年にわたる本プログラムでは、100名以上の映画専攻学生と教員が参加してきました。映画づくりを通じて多様な価値観に触れた彼らが、今度はプログラムで制作した作品を自国のコミュニティに持ち帰って上映を行ったり、他の参加者の映画を紹介するなど、新たな映画交流の場を作り出しています。また、学校間の交流事業も派生しており、ここで培われたネットワークが着実に活用されています。

本プログラムを実現するために惜しみない協力をしてくださった共催者・スタッフの皆様、講師を務めてくださった皆様にはあらためまして感謝を申し上げます。また、本書にご寄稿、ご協力いただきました皆様に感謝申し上げます。

2019年6月
国際交流基金アジアセンター

パイロット版として実施した1回目は、日本映画大学の協力を得て、東南アジア3か国の映画専攻学生を日本に招へいし、各国の映画文化についての理解を相互に深める目的で、学生によるプレゼンテーション、日本の映画関連施設・イベントへの訪問などを実施しました。続く2回目からは、多国籍の学生たちによるグループワークを中心とした構成に移行。東南アジア各国の学生が考案した、東京を舞台にした短編映画の企画ピッチングを成果物として、都内での取材を敢行しフッターを作成しました。日本の学生は、取材対象の調査や行動計画の作成など事前準備段階からラインプロデューサーの役割を果たしました。

2014年度 実施

2015.3.8(日) - 3.17(火)

実施地	日本映画大学ほか都内各所、京都・大阪各所
参加校	インドネシア/ジャカルタ芸術大学、タイ/シラパコーン大学、フィリピン/フィリピン大学フィルム・インスティテュート、日本/日本映画大学
参加者数	学生12名、引率教員3名
共催	日本映画大学

1



DATES

3.9(月)	オリエンテーション・歓迎レセプション 佐藤忠男氏(日本映画大学名誉学長)による講義
3.10(火)	国立映画アーカイブ相模原分館の見学、日本映画大学実習の見学
3.11(水)	各国の映画産業と文化に関するプレゼンテーション 自作短編作品上映・ディスカッション、日本映画大学学生との懇親会
3.12(木)	三鷹の森ジブリ美術館訪問 公開イベント(於: 国際交流基金ホール [さくら]) 第1部: インドネシア、タイ、フィリピンの学生が語る各国の映画状況 第2部: 『同じ星の下、それぞれの夜』上映 シンポジウム「東南アジアで映画を撮る! ~日本の若手監督・脚本家と語る国際共同製作~」 【登壇ゲスト】相澤虎之助(脚本家)、富永昌敬(映画監督)
3.13(金)-15(日)	大阪アジア映画祭参加・映画鑑賞、シネ・ヌーヴォ訪問
3.16(月)	立命館大学・富田美香教授による講義、松竹京都撮影所見学、文化体験

2015年度 実施

2016.3.6(日) - 3.15(火)

実施地	日本映画大学ほか都内各所
参加校	インドネシア/ジャカルタ芸術大学、タイ/シラパコーン大学、フィリピン/フィリピン大学フィルム・インスティテュート、バトナム/ホーチミン映画演劇大学、ミャンマー/ヤンゴン国立芸術文化大学、日本/日本映画大学 【インターン】早稲田大学、立命館アジア太平洋大学
参加者数	学生25名(うちインターン5名)、引率教員5名
特別講師	エドウィン(映画監督)、天願大介(日本映画大学学長)、石坂健治(日本映画大学学部長)
共催	日本映画大学

2



DATES

3.7(月)	オリエンテーション・歓迎レセプション エドウィン監督『空を飛ぶ目撃者の目』鑑賞&分析ワークショップ
3.8(火)	天願大介教授による講義: アクション映画の演出技法 石坂健治教授による講義&ディスカッション: 【テーマ】東京のどこをどう切り取るか 【鑑賞作品】『世界の夜明けから夕暮れまで: -日本・東京篇-』 映像企画のための班ディスカッション
3.9(水)-11(金)	都内で班ごとに取材調査(フッター撮影)・ディスカッション 教員ミーティング(非公開)、懇親会
3.12(土)	プレゼンテーション準備
3.13(日)	映像企画公開プレゼンテーション(於: 国際交流基金ホール[さくら]) 【映像企画名】 Are you There in Japan?(タイ)、Pure(バトナム)、Mask(ミャンマー)、 How to make a passport(フィリピン)、Maneki-Neko(インドネシア) 【講評ゲスト】 諏訪敦彦(映画監督)、藤岡朝子(山形国際ドキュメンタリー映画祭理事)、 安岡卓治(日本映画大学教授)
3.14(月)	三鷹の森ジブリ美術館訪問ほか

未来につながる国際共同制作

マライア・レオディカ（#2 参加者）

東南アジアには、自分の国や地域だけでも数え尽くせないストーリーがあります。そのため東南アジアの若手フィルムメーカーにとって他者と出会い、協働することは大きな意味があります。…and Action! Asiaは、その点において参加者が意見交換し、芸術演習を行える素晴らしいプログラムです。私はこのプログラムに参加して一人のフィルムメーカーとして成長することができ、ここで学んだことは今日の自分のものづくりに生きています。実際、私はいま自分のバンドを引き連れて、東京でこのエッセイを書いているのです。



中でも私が一番影響を受けたのは、天願大介先生によるアクションのワークショップでした。ここでは、日本独特の演技や他者の動きへの意識、一つ一つの動きを意識するためにゆっくりと動くことの意味を教わりました。この教えは、脚本執筆だけでなく楽曲制作の過程においても生かされています。

また、プログラムを通して通訳のサポートが大きな助けとなりました。言葉の変換というものは、私の作品に共通する原動力となっていますが、彼女たちの助けがあって、自身の映像企画プレゼンのための取材で、私たちは日本の様々なフィリピン人コミュニティを訪れ話を聞くことができました。この企画で私は今日のフィリピンと日本の間に存在するものについて注目しました。

そして、…and Action! Asiaのおよそ2年後、富川ファンタスティック国際映画祭 2017で私は映画『Eerie』の企画をピッチングし、National Asian Fantastic Film Awardを受賞し助成金を得ました。また、監督とプロデューサーと一緒に、アジアの映画制作者が地域間で協働して制作・配給を行うという国際共同制作のビジョンを共有することができました。

最後に一言。ハリウッドは放っておきましょう。

国際共同制作は“未来”であり、このようなプログラムは制作者同士の友情やコミュニティを育てるうえで重要です。



photo : Joey Alvero

Mariah Reodica マライア・レオディカ

フィリピン・マニラを拠点に、インディペンデント・フィルムメーカー、メディアアーキivist、ビデオアーティスト、ミュージシャンとして活動。ミカエル・レッドと共同執筆した映画『Eerie』は、2018年シンガポール国際映画祭でプレミア上映され、東南アジア各国で上映された。最近では、キドラット・タヒミック監督最新作『Lakaran ni Kabunyan』（オムニバス映画『それぞれの道のり』の一篇）のために監督のフッターをアーカイブ。ほかにも、彼女の作品は Manila Biennale 2018、Kuala Lumpur Experimental Film Music and Video Festival 2018、Quezon City Pink International Film Festなどの映画祭に出品されている。2019年5月、ギタリストとして参加するバンド The Male Gazeがジャパントアールを行った。



#3 - #5



3～5回目は企画公募により選出された日本・東南アジアの学生による短編映画の制作のほか、現地の映画制作者によるワークショップを実施。学生たちはチームに分かれて、事前にオンラインでのディスカッションを重ね、短期間での撮影・編集を経て、最終的に上映プレゼンテーションで作品講評を受けると共に、質疑応答を通して現地の観客との交流を体験しました。また毎回、教員間で将来的な映画交流について意見交換を行い、この中から学校・地域間の新たな取り組みが生まれていきました。

2016年度 実施

2017.2.26(日) - 3.10(金)

3

実施地	フィリピン大学フィルム・インスティテュートほか、ケソン市およびマニラ圏内		
参加校	インドネシア/ジョグジャ・フィルム・アカデミー、タイ/バンコク大学、フィリピン/フィリピン大学フィルム・インスティテュート、アテネオ・デ・マニラ大学、デ・ラ・サール聖ベニルド校、マレーシア/マレーシアサラワク大学、日本/日本映画大学、名古屋学芸大学、東北芸術工科大学、早稲田大学		
参加者数	学生19名、引率教員4名		
特別講師	アルマンド・ラオ(脚本家)、カルロス・シギオン・レイナ(映画監督)、ピアンカ・バルブエナ(プロデューサー)		
共催	フィリピン大学フィルム・インスティテュート		
協力	アテネオ・デ・マニラ大学、デ・ラ・サール聖ベニルド校	協賛	ソニー・フィリピン(機材提供)



DATES

2.27(月)	オリエンテーション・引率教員による各国映画プレゼンテーション ピアンカ・バルブエナ氏による講義: 映画プロデュース&企画ピッチングについて、歓迎レセプション
2.28(火)	カルロス・シギオン・レイナ監督による講義: 国際映画祭を視野に入れた制作戦略、映画演出について ベベ・ジョクノ監督によるトーク&機材紹介、短編映画制作のための機材チェック、グループディスカッション
3.1(水)	アルマンド・ラオ氏による脚本ワークショップ、班ごとに映画撮影準備
3.2(木)-4(土)	映画撮影(於: フィリピン大学周辺)
3.5(日)-7(火)	編集・ポストプロダクション(於: アテネオ・デ・マニラ大学)、 教員ミーティング(非公開)、懇親会
3.8(水)	短編映画上映&公開プレゼンテーション 【講評ゲスト】アルマンド・ラオ、カルロス・シギオン・レイナ、 マーク・メイリー(映画監督、デ・ラ・サール聖ベニルド校映画学部長)、レイモンド・レッド(映画監督) 映画関係者交流レセプション
3.9(木)	モウエルファンド・フィルム・インスティテュート見学 【レクチャー】ニック・ディオカンボ(フィリピン大学フィルム・インスティテュート准教授、ドキュメンタリー映画作家、映画史家) イントゥラムロス見学 シナグ・マニラ映画祭オープニング参加、映画鑑賞

※制作作品の詳細は16頁参照

#3: 映画を形づくった13日間

サリ・ダレナ (#2 参加、#3 共同ファシリテーター)

アジア域内の異なる文化を背景に、意欲高い若いフィルムメーカーたちが文化や言葉の壁を乗り越えて、一緒に映画を撮ること。映画におけるコラボレーションの中で、これ以上の興奮はありません。

最初の2年は日本で行われた本プログラムは、3回目にして初めて日本国外で実施されることとなり、フィリピン大学フィルム・インスティテュート(UPFI)はホスト校として、アテネオ・デ・マニラ大学とデ・ラ・サール聖ベニルド校の協力を得て、“映画における国際的なつながり”をテーマとしたワークショップを実施しました。13日間のプログラムでは、プロデューサーのピアンカ・バルブエナや監督のカルロス・シギオン・レイナ、脚本家のアルマンド・ラオという名だたるフィリピンの映画制作者が講師となり、その知識や洞察力を共有するだけでなく、学生たちの映像企画のフィードバックもしてくれました。

この13日のプログラムを実現するため、私たちはパラメーターを設けました。制作期間を2日間のプリプロダクション、3日間の撮影、3日間のポストプロダクションに配分し、実用面と安全面を考慮して、大学のキャンパス内で撮影することを条件としました。そのことで学生たちは全面的に撮影許可を得られ、また大学のジープニーが移動・運搬手段として大活躍しました。また、小道具や美術道具などの費用や役者の出演料などの費用として、少額の制作費が各チームに割り当てられました。

そして、卒業制作や学生映画祭と同じように、ここで作られた短編映画は大きなスクリーンで上映されたときにその最高潮を迎えました。学生たちは自分たちの映画をプロの映画制作者たちと観客にプレゼンし、フィードバックや講評を受け、フィリピンの観客との交流を図りました。アイデンティティや食文化、独自の文化的要素に触れる多様な物語について、現地の学生からは興味深い質問が寄せられ、参加学生はそれに答えることの喜びを感じていました。映画を学ぶ学生にとって、パブリック・スクリーニングは重要な学びの場です。目の肥えた観客と一緒に映画を観て、彼らの批評に耳を傾け、受け入れ、対話できる機会なのです。それはまた映画祭に出ていくための練習にもなり、そうして競い合うことは創作と学びのプロセスにもなります。

UPFIは初めてこのような交流プログラムを共催し、主要なロジスティクスを支える大変な役割を担いましたが、ポストプロダクションの場を提供してくれたアテネオ大学、撮影機材を提供してくれたデ・ラ・サール大学、ソニー・フィリピンのサポートを得て実現することができました。そして、このワークショップを通して、学生たちは短編映画と一緒に作るというゴールのために、多くの壁一言語、宗教、文化一を乗り越えました。この経験は自国内、そして地域内外の国際的な舞台における将来的な協働への足掛かりとなりますし、このような開かれたコラボレーションを促進することこそが国際連携にポジティブな結果をもたらすと思います。UPFIはこのような国際交流の経験を重ねることができ、今後の活動に生かすことのできる貴重な知識を得ることができました。



Sari Dalena サリ・ダレナ

フィリピン大学フィルム・インスティテュート(UPFI)教授、映画制作者。UPFI卒業、モウエルファンド・フィルム・インスティテュートで16ミリ実験映画制作を学ぶ。その後、ニューヨーク大学で映画制作を学び、美術学博士号を取得。共同監督作『Memories of a Forgotten War』(01)と『Rigodon』(06)は、多くの国際映画祭に出品、ニューヨーク近代美術館(MoMA)で上映。2012年、長編監督作『Ka Oryang』でシネマワン映画祭作品賞と監督賞を受賞。映画制作の功績が称えられ、2015年より3年間フィリピン大学フィルム・インスティテュートのディレクターを務めた。

2017年度 実施

2018.2.28(水) - 3.13(火)

4

実施地	SKIPシティ彩の国ビジュアルプラザほか埼玉県・川口市周辺、日本映画大学
参加校	タイ/スアン スナンダ ラーチャバット大学、ベトナム/映画人材開発センター (TPD)、マレーシア/マレーシアサラワク大学、ラオス/国立美術大学、日本/神戸芸術工科大学、東北芸術工科大学、日本映画大学、武蔵野美術大学、早稲田大学
参加者数	学生21名、引率教員4名
特別講師	井口奈己(映画監督)
共催	日本映画大学
協力	名古屋学芸大学
後援	全国映画教育協議会
協賛	キャノンマーケティングジャパン株式会社、株式会社 ナックイメージテクノロジー



DATES

3.1(木)	オリエンテーション、歓迎レセプション 井口奈己監督による『犬猫』鑑賞&分析ワークショップ
3.2(金)	短編映画制作のためのグループディスカッション 撮影・照明機材デモンストレーション
3.3(土)	班ごとに映画撮影準備
3.4(日)-6(火)	映画撮影(於: 川口市周辺)
3.7(水)-10(土)	編集・ポストプロダクション(於: 日本映画大学) 教員ミーティング(非公開)、懇親会
3.11(日)	短編映画上映&公開プレゼンテーション(於: 国際交流基金ホール[さくら]) 【講評ゲスト】井口奈己、石坂健治、小口詩子(武蔵野美術大学映像学科教授)、渡部真(名古屋学芸大学映像メディア学科教授) 映画関係者交流レセプション
3.12(月)	ナックイメージテクノロジー(機材レンタル部)、東宝スタジオ見学

※制作作品の詳細は17頁参照

5か国の映画制作者たちによるシンフォニー

グエン・ホアン・ヴィエット (#3 参加者)

私は常々、映画は世界共通の言語だと考えてきました。その国の言語を話せなくとも、映画を理解し愛することができます。2018年、...and Action! Asiaでの経験を通して、私はこのことを再認識しました。

5か国の参加者たちが、言語は異なるけれども、映画言語を通じて面白いかたちで物語を一緒に伝えていきました。このプロジェクトはまるで異なる音色や楽器、声が集まって出来るシンフォニーのようで、最初にかみ合わないけれども、忍耐やオープンな姿勢、そして映画に対する情熱を共有することで皆がつながっていきました。完成した作品はもしかしたら不完全で未熟かもしれませんが、このプロセス、そして教員や主催者たちの熱いサポートには感謝しています。彼らはまた、私たちにとって最初の、最も誠実な観客でした。

朝から晩まで、準備から撮影、編集をともにやり、私には面白い仲間ができました。また、日本の映画の先生や学生たちとの交流を通して、私が敬愛する日本の様式や日本映画の質についてもっと理解できました。東宝スタジオへの訪問も、日本のプロフェッショナルの制作システムについて学ぶ助けになりました。

プログラム参加後、映画制作だけでなく、教育や配給分野での国際共同の取り組みにも興味を持つようになりました。ここで作った作品は映画人材開発センター(TPD)で上映され、私は自国の観客にプログラムでの体験を共有しました。たくさんの若い観客が集まり、Q&Aは盛り上がり、映画制作についてインスピレーションをもたらすことができました。このワークショップで学んだことを今度は彼らのプロジェクトで共有し役立てることができて、とても嬉しく思います。

以降、私は自身の初長編企画『TILL THE CAVE FILLS』に引き続き取り組んでいるほか、自身が経営する ever rolling filmsでほかのプロジェクトにも取り組んでいます。短編作品『ROOMMATE』は国際映画祭でも上映されたほか、ハノイ国際映画祭で受賞し、映画制作の道を進む後押しになりました。また、現在はTPDでOpen Shortsというプログラムを立ち上げ、毎月新しい短編映画の紹介を行っているほか、新作の短編『GOODBYE NEIGHBOR』を執筆しています。



Nguyen Le Hoang Viet グエン・ホアン・ヴィエット

ベトナム出身のフィルムメーカー。短編映画『THE CAT AND THE ORANGE SEEDS』はショートショート フィルム フェスティバル&アジアなどの映画祭に選出。最新作『ROOMMATE』は BFI Flare Londonで上映、ハノイ国際映画祭 2018で最高短編映画賞を受賞した。FLY(Film Leaders Incubator) や Autumn Meeting、Singapore Southeast Asian Film Labなど数多くの映画ラボに参加。初長編企画『TILL THE CAVE FILLS』は、脚本ラボ Southeast Asian Fiction Lab(SEAFIC)2019に選出され、現在開発中。

...and Action! Asia から、 地域の映画への取り組みがより豊かに—

ヨウ・チョン・リー（#3、4参加教員）

2017年と2018年、二度参加した ...and Action! Asiaは、私たちにとってどちらも楽しい思い出です。何よりも素晴らしいかったのは、普段なかなか見られない生徒たちの変化の過程が見られたことでした。東南アジアと日本の他の大学の学生や指導教員との協働を通して、私たちは慣れ親しんだものとは異なる映画文化を経験しました。

このプログラムを通して、学生たちはディスカッションを始めとした映画制作に必要な自信とスキルを磨くことができましたし、より広い観客に自分たちの作品を披露し、質疑応答や意見交換を行うことができました。また、帰国後すぐ、私たちは大学内で作品上映と報告会を行いました。このような活動は、...and Action! Asiaや類似プログラムへの参加を希望するほかの学生を後押しするものでもありますし、特にマレーシア国内でもクアラ Lumpur を拠点とする映画や文化産業から遠く離れたボルネオにある我々の大学にとっては貴重な機会なのです。

他方、ほかの指導教員との出会いをきっかけに、プログラム外で彼らと協働を深める機会にも恵まれました。昨年には、小口詩子先生の協力で、ドキュメンタリー専攻の学生とともにおおむら・あまみ国際学生映画祭に招待され、その後、同映画祭の上映作品を自分が運営するミニフィルムフェスティバルの傘下にある隔週の映画上映会で企画上映することができました。そのおかげで多くの観客が海外の映画祭に参加しない限り出会えない映画を観られることを喜んでいました。マレーシアにおける芸術・映画鑑賞の文化は、インドネシア、フィリピン、タイなどの地域と比べるとまだゆっくり成長しているのです。

このプログラムへの参加を経て、私は学内外での映画・芸術鑑賞に対する衝動と情熱をしっかりと育てていきましたが、すべて自分たちの手によって始まるということに気づきました。不十分な状況や環境を変えていくには自らから変化を始めるほかありません。ですからまず、映画などの芸術を鑑賞するコミュニティをつくることを目的として、学生たちと積極的に協力してコミュニティでの上映会を企画しています。隔週で行っている上映会 Duduk dan Tonton(座る&見る)では、毎回約40人から80人の観客が集まります。ここでも...and Action! Asiaで構築したネットワークが生かされています。

また、本プログラムで制作した作品は、ペナン・ジョージタウンで開催された SeaShorts Film Festival 2018で企画上映することができ、大学内でも80人以上の観客に向けて上映されました。これは一般の人々の映画鑑賞の促進にもたしかにつながっています。そして2018年8月、タイのスアン スナンダ ラーチャバット大学の招待を受け、私は40人の学生にドキュメンタリー映画制作と鑑賞のワークショップを行いました。これは2018年の...and Action! Asiaで会った同大学のティラポン・セリサムラン先生との交流を通して実現可能となりました。

...and Action! Asiaは参加者に多大な影響をもたらしましたが、一番重要なのは、地域内の映画に関する取り組みを豊かにしてくれたことです。国際交流基金アジアセンターのスタッフの尽力に感謝します。



Yow Chong Lee ヨウ・チョン・リー

マレーシア・サラワク大学(UNIMAS)でドキュメンタリー映画制作、映画史、映画理論を教える。2013年から4年間、マレーシアで最も長く続く学生映画祭「ミニフィルムフェスティバル」のディレクションを行う。2015年より映画上映会の企画を始め、講演会やワークショップ、映画祭などの多くの映画関連イベントに携わっている。

「人間力」が試され、意識される共同制作の場

小口詩子（#3～5参加教員）

①第3回@フィリピン(視察)、②第4回@日本、③第5回@インドネシアと、全国映画教育協議会を通して参加させていただいた。

開催国の諸背景、ホスト校の気風と指導方針・体制、打ち出す課題テーマ、選択される学生企画と参加する国・学校・学生・教員などにより、制作内容は大きく変わると実感した。基準にもよるが、三回三様の成果があったと思う。学生たちにとり、本プログラムの共同制作は、映画制作のノウハウを学びながら、その要となる「人間力」が試され、意識され、それが最大限に練磨される場であった。

そもそも映画制作は、プリプロ～プロダクション～ポストプロ、上映&鑑賞&批評に至るまで、全工程に負荷と動機が絡み、絶え間ないコミュニケーションと相互理解のためのすり合わせ、個の判断と実行が必須。この負荷と動機の強度・バランスが絶妙な人材育成装置?にも思え、参加学生の個々の意識の高さ、異種のぶつかりあい、短期結果が鍵と感じた。

①では、半プロのフィリピン大生が有能なラインプロデューサー。日本の学生は、多民族混合での制作やコミュニケーションに慣れた東南アジアの学生から刺激を受け、あらゆる手段で意思疎通をはかり、自己挑戦と成長を繰り返す。

第一線の映画人講義、町化巨大キャンパスでのロケ、シナグ・マニラ映画祭の豪華パーティ、民族映画史の誇り・・・完成作は1,000人キャバの映画館上映で大観客を前にプレゼン&ディスカッションと、フィリピン映画界の勢いを圧倒的に体感させた。

②は経験の浅い学年、機会の少ない国の参加も期し、チームワークや創作の根本を捉え直す機会になったかもしれない。

③のドキュメンタリー制作ではジャカルタ芸術大学の采配により、貴重で意義深い経験をさせていただいた。事前のSNSによる活発なディスカッションに始まり、学生たちは社会の現実に厳粛に向き合い、葛藤と緊張の中で作品を完成させた。

武蔵野美術大学では①の視察後、参加校ではないがシンガポールのラサール芸術大学との共同制作ワークショップを試行し、同年には卒業制作を協働させていただき学生が出た。また、企画運営に携わったおおむら・あまみ国際学生映画祭に、マレーシアサラワク大の若手教員が立ち寄り、自身がプログラムする Mini Film Festivalに上映作をラインナップしてくださった。こうした国際協働への試行は、全て...and Action!をきっかけとする恩恵であり、これまでに関わった学生や教員間の絆から、更なる発展の機会が模索できればと思う。



小口詩子 コグチ・ウタコ

武蔵野美術大学 映像学科教授。映像制作、洋画パブリシティ、映画祭スタッフ、宣材制作、ライターなど遍歴。映像の制作現場と作品を創出するワークショップ、コンペ審査ほか、若い才能の発掘支援に四半世紀携わる。

2018年度 実施

2019.3.1(金) - 3.14(木)

実施地	ジャカルタ芸術大学ほか、ジャカルタ市内
参加校	インドネシア/ジャカルタ芸術大学、フィリピン/フィリピン大学フィルム・インスティテュート、 ベトナム/映画人材開発センター(TPD)、ミャンマー/ヤンゴン国立芸術文化大学、 日本/東北芸術工科大学、日本映画大学、武蔵野美術大学
参加者数	学生 21 名、引率教員 4 名
特別講師	ウィウイド・セトヤ(プロデューサー)、ユディ・ダタウ(映画監督・撮影)、 エンサディ・ジョコ・サントソ(撮影・プロデューサー)
共催	ジャカルタ芸術大学
後援	全国映画教育協議会
協賛	FFTV CHANNEL、CINEMA XXI

5



DATES

3.2(土)	オリエンテーション、ミニパネル展見学 過去制作作品&短編ドキュメンタリー鑑賞、 短編映画制作のためのグループディスカッション
3.3(日)	ユディ・ダタウ監督による講義: ドキュメンタリー映画を監督する ウィウイド・セトヤ氏による講義: ドキュメンタリーのプロデュース エンサディ・ジョコ・サントソ氏による講義: 撮影技術 グループディスカッション
3.4(月)	撮影・録音機材デモンストレーション、班ごとに映画撮影準備
3.5(火)	映画撮影準備・取材
3.6(水)-8(金)	映画撮影(於: ジャカルタ市内各所)
3.9(土)-11(月)	編集・ポストプロダクション(於: ジャカルタ芸術大学)、教員ミーティング(非公開)
3.12(火)	短編映画上映&公開プレゼンテーション(於: TIM XXI)、交流レセプション
3.13(水)	インドネシア国立博物館、ナショナル・ギャラリー、独立記念塔見学

※制作作品の詳細は18頁参照

予期せぬハプニングで発見した、それぞれの考え方

小池美稀 (#5 参加者)

私が...and Action! Asiaに参加して、早数ヶ月が経とうとしています。普段は、ドキュメンタリー制作をほぼひとりで言う私が、監督として国籍混合のチームと共に駆け抜けた二週間のことはよく思い出します。



私たちのチームは、インドネシア、ベトナム、ミャンマー、と私(日本)の5名でした。通常、このような短期の制作では、作品の構成(内容の流れ)はあらかじめ決めておき、おおよそ予定された中で執り行うのが失敗の少ない堅実的な作り方と言えます。ところが私たちのチームでは、取材対象者と一時的に連絡が取れなくなるなど、予期しない出来事が多々起こりました。そこであえて起きた出来事を追い、作品に落とし込むことで、予定調和のうちに留まらない作品作りに挑戦しました。その結果、参加前には予想もできなかった映像と、エンディングとの出会いがありました。

そうした制作の過程で興味深かったのは、起きた出来事を、どのように受け止め作品に落とし込むのかについて、メンバーそれぞれで解釈が違ったことです。連日の打ち合わせでは、「この出来事は、考え方によってはこういう見方もできる」といった風に、様々な視点が行き交いました。私は、自分でも気が付かなかった物事の見方に驚くこともあれば、なぜそういう見方をするのか理解出来ないこともありました。しかし、その場では理解できなかった視点も、いつか別の場面で活かせると思うのです。

彼らには彼らの知識と経験があり、視点とはそこからやってくるものです。私はその時、そうした視点を持ち合わせていませんでした。けれども、今後の制作において起こった課題を、彼らの経験と視点を借りて、乗り越えられる可能性はあります。

...and Action! Asiaのもとには、歴史、文化、バックボーン、得意分野の違う人々が一堂に集まっていました。参加者全員が映像制作経験者という点で共通のつながりを持っているため、各々の視点や、ワークフローの違いに共感し、理解することが出来ます。参加したことで、日本にいただけでは知り得なかった、新しい視点と広い経験に出会えました。

何かに行き詰まった時、世界のどこかで同じように試行錯誤しながら制作をする彼らの知識や経験が助けてくれるかもしれない。国際共同制作は、水平思考の幅を広げ、閉じた状況では気づきにくい新しい発想や展開、あるいは課題解決創出の可能性を感じました。

このような貴重な体験と賛賞な機会を頂けたことに改めて、御礼申し上げますと共に、私の未熟な知識や経験も、どこかで彼らの一助となるよう願うばかりです。



小池美稀 コイケ・ミキ

武蔵野美術大学映像学科卒。大学ではドキュメンタリーを制作。卒業制作では原発事故後の市民運動をテーマにチェルノブイリと福島を2年かけ現地取材を行った。現在は、フリーランスで活動。人々の暮らしと自然環境に関わるドキュメンタリー制作を続ける。

#5：次世代に文化をつなぐ架け橋の起点として

スリアナ・パラミタ（#5 共同ファシリテーター）

今回「...and Action! Asia #05」の開催地としてインドネシアが選ばれ、ジャカルタ芸術大学映画・放送学部がこのプログラムの共催者として任されたことは大変な名誉であり、また様々な国からの参加者にインドネシア、特にジャカルタを紹介することのできる大きな機会と捉えました。

このプログラムを通して、映画学校で教育を受けている若い映像作家たちは、ジャカルタの文化やそこに住む人々について話し合い、探求し、理解する様々な機会と忘れがたい経験を得ることになりました。また、普段自国の大学や芸術学校で教える講師たちはメンターとして、様々な国の学生から成るグループを指導しました。さらに、指導教員は各自の学校のカリキュラムについて議論する機会を得、今後の映画教育の発展のための協働の可能性を開きました。

今回のワークショップでの課題は、限られた時間の中でドキュメンタリー映画を制作するという点、そして異なる性格と視点を持つ者同士で議論を行う中で言語の壁がしばしば立ちどころということでした。しかし、参加者一人ひとりにとって障害と思われたこれらのことは挑戦となりました。互いの制約を相互に理解し、解決策を考え、そして容易に諦めないこと。ドキュメンタリー映画の制作という目標を達成するまで、一連の学びの過程は続きました。

学生たちが直面したあらゆる障害はしかし、ワークショップの成果として映画が映画館の大きなスクリーンで上映されたとき、すべて取り払われました。そしてプログラムが終了し、彼らが自国に戻るとき、過ぎ去った日々が自分たちの新しい側面を引き出したことに気づき、異なる背景を持つ人間同士が調和することの価値を持ち帰りました。

国際交流基金アジアセンターによる ...and Action! Asiaは、単に国際的な映画制作のワークショップというだけでなく、次の世代へ国々の文化をつなぐ架け橋であると言っても過言ではありません。私たちはアジアの若い映像制作者である学生たちが出会い、映画を通してそれぞれの考えを話し合い、共有するための媒体となる戦略的なプログラムを生み出せると信じています。なぜなら、...and Action! Asiaは、より大きな地図につながる出発点であると信じているからです。

2019年4月30日
インドネシア、ジャカルタにて



Suryana Paramita スリアナ・パラミタ

ジャカルタ芸術大学映画・放送学部専任講師、学外連携副学長。2009年にインドネシアの主要な地上波テレビ局で脚本家としてキャリアをスタートする。その後、舞台芸術の世界に飛び込み、脚本家・助監督として活躍。現在、ジャカルタ芸術大学映画・放送学部で脚本を教える傍ら、フリーランスで脚本を執筆している。



The Philippines

3

テーマ 「Student Life(学生生活)」「Impressions of Manila(マニラの印象)」「Richness and Diversity in Cultures(文化の多様性、豊かさ)」

撮影地 フィリピン・マニラ圏ケソン市

『KELLY AND THE TV HEAD』 2017年/6分/ドラマ

今日はケリーの誕生日。親友のジェイドは、とっておきのプレゼントを用意したと言ってケリーを町の映画館に連れてくる。映画に乗り気でないケリーだが、そこで予期せぬ体験をすることになる。



監督：Ikmar Sarbini、脚本：Ikmar Sarbini/Nehemiah Yap、プロデューサー：Kaye Banaag、助監督：Gi Ilagan、撮影：Supakit Sonsee/Egha Harismina、編集・VFX：Egha Harismina、美術：福田健人、音楽：Elijah Salvador/Nehemiah Yap、録音：John Peter Chua、出演：Pau Benitez、Alice Gozales

『TASTE OF LIFE』 2017年/6分/ドラマ

フィリピン料理の記事を書くために、本場を訪れたタイ人フードブロガーのナム。現地ガイドのリリーは地元の屋台料理を紹介するが、誤ってムスリムの彼女に豚肉料理を提供してしまう。誤解で始まった食の紀行は、やがてふたりを友情でつないでいく。



監督：Atthawut Intagoon、脚本：Atthawut Intagoon/Alphonzo Alejandro、プロデューサー：Miggy Hilario、助監督：Alphonzo Alejandro、撮影：Evan Secunda、編集：Atthawut Intagoon/Evan Secunda、美術：石井光一郎、録音・音響：Nehemiah Yap、出演：Elimore Evangelista/Genevieve Reyes

『RED』 2017年/7分/ドラマ

自分の“色”を探し求め、ふたつの扉の前に立つ一人の学生。扉を開いた向こう側には、試練を伴うドラマが待ち受けている――。



監督・脚本：林賢二、プロデューサー：Brainard Bill Barrinuevo、助監督：Tin Chanabangkaew、撮影：Herry Setyadi、編集：Anthony Saleh Ngau、美術：Katrina Ysabel P.Villarosa、出演：Victoria Fabella、Kristia Doroy、Cai Antonio

Japan

4

テーマ 「Hope(祈り)」「Secret(秘密)」

撮影地 埼玉県川口市ほか

『Daily Train』 2018年/8分/ドラマ

とある駅のホームのベンチ。背後から漏れ聞こえてくる音楽に耳を傾けるヒロタ。偶然にも自分の好きな音楽を聴いていたミネコに、自分のお気に入りのアルバムを手渡す。音楽を通じて、心を通わせるふたりだが…。



監督：Herald Nyumbang Anak Nyulim、脚本：Nguyen Diep Thuy Anh、プロデューサー：堀川恭平、撮影：Sarun Kositsukjaroen / 藤本匠、音響・音楽：藤本匠、編集・美術：佐々木茜、録音：Phoutthanome Keopaseuth、出演：むぎでじこ、岡崎洵

『Your shirt, My socks』 2018年/13分/ドラマ

都会の一角にあるコインランドリー。誰かが置き忘れたタオルは清掃員に重宝され、別の日に誰かが忘れたニットの小物は、思わぬ形で誰かの心を温める。「お忘れものボックス」が、国も職業も異なる人々をつないでいく。



監督：Ekin Kee Charles、脚本・プロデューサー：芦澤麻有子、撮影：Nguyen Le Hoang Viet、制作マネージャー：金明充、音響：東山音々、編集・録音：Witchayoot Ponpraserd、美術：岡田真由子、照明：Xayaveth Keovilay、出演：川島信義、村田奈津樹、南久松真奈

『The Image of Secret』 2018年/10分/ドキュメンタリー

「あなたには、人に言えない秘密がありますか?」「あなたにとって秘密とは何?」。インタビューを通して、人々が語る秘密のこと。そして絵で表現される、それぞれの秘密のイメージ。自由でゆるやかな探求が続いていく。



監督・脚本：Jirakan Sakunee、プロデューサー：吉田大樹、助監督：草間諒太 / 廣瀬萌恵里、撮影：Tran Thanh / 廣瀬萌恵里、編集：廣瀬萌恵里 / Tran Thanh / Wravong Phrachanh、録音：Kasmirul Iqmal Noruden、脚本監修：Wravong Phrachanh

Indonesia

5

テーマ 「Survival(サバイバル)」

撮影地 インドネシア・ジャカルタ市内

『Cinta,Sinta (Love,Love)』 2019年/9分/ドキュメンタリー

インドネシアとフィリピン、それぞれ生まれ育った国で暮らす三人のトランスジェンダーたち。周囲の人々との関係の中で体験してきた三者三様の葛藤が語られる。

監督：Kervin Quieta、助監督：Sophia Isip、撮影・録音・音響：川崎たろう、編集：Luqman Hakim、制作マネージャー：Putri Ahimsa Ibrahim、制作助手：Carine Nabila



『I'm on the way』 2019年/8分/ドキュメンタリー

ジャカルタの代名詞ともいべき交通渋滞。毎日早朝に出発し、渋滞に苛立つ夫の運転する車で通勤する女性、バジヤイ(三輪タクシー)で生計を立てる運転手。都市部におけるこの問題と、彼らは日々どう付き合っているのか注目する。

監督・脚本監修：Herry Bhaskara、プロデューサー：Paula Nanlohy、撮影：廣瀬萌恵里、編集：Hein Thura、録音・脚本監修：Tran Thanh Van、制作助手：Muhammad Abdillah Farhan



『Starling's Journey』 2019年/10分/ドキュメンタリー

交通渋滞の激しいジャカルタでは、路上でコーヒーやティッシュなどを手売りして暮らす人々がいる。19歳のファリスもそのひとり。都市整備が進む裏側で、時に警察の取り締まりに追われながら、生存競争の厳しい都会でどのように生き抜いているのか？

監督：小池美稀、音響・制作マネージャー：M. Farhan Ananda、撮影：Achmad Abdul Toyib、プロデューサー：Htet Zin Thein、編集：Ho Thanh Thao、制作助手：Mario Ewansya



『Happy Siti?』 2019年/11分/ドキュメンタリー

経済成長が続く一方で貧富の格差が広がるインドネシア。大都市ジャカルタで廃棄品回収をしながら苦しい生活を送る家族の一日を通して、“幸せとは何か？”を問う。

監督：尾崎優一、プロデューサー：Fadhilah Khairani、助監督：Bagaditya Ganetha、編集：Aaron Alsol、撮影：Myo Thar Khin、音響：Nguyen Duy Thanh、制作助手・通訳：Eileena Julinda Lyana



※作品は国際交流基金アジアセンター公式サイトにて配信。https://jfac.jp/

REPORT

東南アジアでの映画制作体験をふりかえる

「S.T.E.P. 大学連携による映画人育成のための上映会」より(2019年3月21日(木・祝)、於：新宿K's Cinema)

登壇者：小口詩子(武蔵野美術大学教授)、尾崎優一(#5参加)、小池美稀(#5参加)、林賢二(#2・#3参加)

小口：フィリピンでの実施時に林さんが監督された作品『RED』は観念的なテーマでした。基本的にコミュニケーションは英語で、文化的背景が異なる人たちが構成されたチームで制作していく中で、どういう風にイメージを共有していったのでしょうか。

林：観念的なことを伝えるうえで、まず自分の宗教観を伝える必要はないのがすごく難しかったです。キリスト教やイスラム教、それぞれ宗教観が違う中で、個人的な解釈を英語で伝えるのが難しかったです。逆に、向こうが辞書で「お前が言いたいことはこういうことか？」と歩み寄ってくれました。また、他の映画のワンシーンを写真や映像で見せ合ったりして、イメージを伝えるツールにしていました。



小口：今年はドキュメンタリー制作で、尾崎さんと小池さんは監督を務めました。この短期間の中でどう成立するのかという不安がありましたが、地元の人も立ち入りにくい場所での取材も敢行されました。SNSでの事前のディスカッションも重要なキーになっていたと思います。

小池：私としてはいろんな現状を知りたくて、現地の学生に沢山リサーチをお願いしました。彼らからも、こういう人がいるよという様にいろんな提案があったので、かなりの手持ち資料を得て行くことができました。

尾崎：僕たちも一応していましたが、皆忙しくて上手くできなかったのと、諸事情でプログラム初日に取材対象が変わってしまい…。現場で取材内容を変えていきました。

小口：先生方を含め現地スタッフのご協力がありましたが、仕上げの過程でも常に常にベターな形を追求する姿には凄まじいものを感じました。実際にトライして、そこから見えるものからまた話をして…という、すごく良い制作の形を追求していたと思います。

尾崎：「良くなるのなら一回やってみよう」というのは、言う

までもなくみな思っていたので、編集してから講師にアドバイスをもらい、それに挑戦してみるというのを何回もやりました。本当に良いチームでした。



小口：小池さんの班は制作へのアプローチが各国の学生でバラつきもあったと思いますが、チームワークはどうでした？

小池：たしかに、きちんと構成を決めてその通りに作るのと、今起きていることを受けてそれをどんどん作品に取り込むのと、考え方にバラつきはありました。そのたびに何で今起きていることを取り入れる必要があるのか、それがどういう効果をもたらすのかという話し合いにかなり時間を費やしました。進みながら差を縮めて、差が出来てはまた縮めてというような作業の繰り返しでしたが、それはそれで非常に面白い体験でした。

小口：ではこのプロジェクトでの経験が、今後の自分にどう繋がっていくと思いますか？

小池：何でこの作品が必要かとか、何で作りたいかということプレゼンしないといけないタイミングはたくさんありますが、その練習というか、何度も言葉を重ねて説得することを英語で出来たのは非常に良かったですし、今後の自分にとって重要な方法の一つになると思います。

尾崎：僕が感じたのは、作りたい気持ちとか、より良くしたい気持ちというのはどの国の人でも一緒だということです。映画の基本となる、自分の中で一番楽しいとか面白いという感情はどこにでもあるんだということに改めて気づかされ、自分の中で学びました。

林：今ドキュメンタリーの仕事をしていますが、一人一人違うところから歩み寄っていくのが常です。国際交流で色々な国とやるというのは、そういうところに意味があるかと。一つのものを作る時に感じた繋がりとというのは、今後も大事にしていきたいです。

日本の映画教育現場から考える国際交流の役割

鼎談：石坂健治(日本映画大学映画学部教授・学部長)、土田 環(早稲田大学基幹理工学部専任講師)、渡部 真(名古屋学芸大学メディア造形学部教授・学部長)

2019年4月28日、国際交流基金アジアセンターにて

※敬称略・五十音順

渡部：このプログラムの始まりの経緯をまず聞きたいのですが。

石坂：2014年に国際交流基金アジアセンターが開設された時に、映画分野における若い世代の交流を日本と東南アジアでやりましょうということで始めました。一回目は2015年3月、日本映画大学（以下、映画大学）が受入をしました。

土田：初年度と2年目は日本でやりましたが、東南アジアの学生が日本に来て何を持ち帰られるかということをものごく考えました。京都のスタジオに行ったり、日本の映画史と映画産業を知ってもらう目的で『豚と軍艦』を観てもらい、佐藤忠男先生に話していただいたりしました。滞在期間中に映画を作るのはハードルが高いので、最初の年はそれを実施せず、半日かけて参加校の卒業制作や制作作品を見せ合いましたが、学生たちは他の大学の子たちの映画を観たいので喜んでいました。タイの大学も映画制作の技術を学ぶ学科ではないけれども、皆結構作ってましたね。



石坂：みな滞在中にじゃんじゃん撮ってましたね。制作プログラムがあろうがなかろうが旅日記のように小さいカメラを回して、次々ネットにアップして。それこそペンで文章を書くみたいに撮るので、映画作りには段取りがあることを日ごろ教えている側からすると全く違うやり方で、このギャップはどうするかと思った記憶があります。

土田：武蔵野美術大学など美大で映像を作ってる人はそこまで抵抗がないかもしれませんが、映画大学などとは（スタイルが）結構違いますから。それはそれで良いことではあると思いますが。

石坂：（プリランテ・）メンドーサ監督の現場も同じ感じで、気楽に小型カメラを回して、ライトも焚かないし、現場は少人数で。そういうやり方で撮ったのがカンヌなど世界最高峰の舞台に出ていくわけで、学生だけでなく、これから考えなき

やいけないなと思ったのが一つ。それと、うちの大学が特にそうかもしれませんが、日本人を外に出して交流させようというコンセプトだったのが、ここ2、3年で海外からの留学生がものすごく増えて、学校の中が混成チームになっているのでわざわざ外に出てやることの意味が自分の中で問われ出した感じですね。プロの撮影現場もだんだんそうなっていくだろうということは学生にも言ってます。

土田：日本映画の現場は助手や制作部の人手が足りないと言われてます。良いことか分かりませんが、一般的な産業の考え方を基準とすれば、外国人労働者がそこを埋めていくこと自体は不思議ではありません。また、留学生たちも映画の仕事に就きたくて日本へ来ているわけですよね。けれども、日本の映画・映像制作会社は、一部を除いて採用時に留学生枠を設けないので結構ハードルが高いですね。

石坂：一方で、日本で起業したいという留学生もいて、実際にした人もいます。わが世代のバブルの頃の感じです。

土田：安岡（卓治）先生が指導講師を務めた2年目は、映画大学の「人間総合研究」を模したかたちで、企画のピッチング・セッションまでを行いました。プレゼンテーションをするなかで、チーム作りや映画主題の切り取り方などを学んでいくという内容で、英語ができる人中心になることもありましたが、発表の役割分担も良く考えられていて、参加者はいまも交流が続いていると思います。

石坂：それで満を持して3年目で外に出たわけですよね、フィリピン大学に。

渡部：フィリピンには日本から学生3人が参加しましたが、美術をやる人もいれば監督をやる人もいて、それぞれのパートを上手くこなしていました。監督をした林賢二君（映画大学）は特に自己主張するのが大変だったと思うけど、相当頑張ってコミュニケーションを取っていたので、彼の人間的な成長というのは大きかったです。これは（全国映画教育）協議会のテーマでもありますが、単に映像作家を作るだけでなく、人間として成長するという意味で、このプログラムはよく機能を果たしていたと感じます。

土田：参加者の評価として、一番良かったのが、班員同士のネゴシエーションや、自分の考えをどうやって表現して相手に伝えるかを学ぶことができたという声が毎回多くあります。

本来それは言語や国籍に関係ない話であって、少し皮肉なことを言うと、それが楽しかったというのは大学のカリキュラムのなかでこのプロセスができていないというか、学生たち自身に見えにくいんですね。多分いつもいる環境だと見えにくいことが、こういう所に来て顕在化するということかと。

渡部：今年出来上がった作品を観ると、ドキュメンタリーだからしませんが、いわゆる日本映画の伝統とは全く別に、他の国の学生たちに自然に溶け込んでいる印象を受けました。構造的なものや仕組みを考えて、そこを切り取ろうとすると四苦八苦しちゃうけど、映像の連なりだけで出来上がる感覚的なものが多く、ビビッドな感じが出てました。選択として、ドラマからドキュメンタリーにしたのは良かったのでは。



石坂：英語で応募するというハードルがうちの大学では応募者が伸び悩む理由になっていますが、その中で応募した林君や尾崎優一君たちを見てみると、やっぱりチャレンジした子は何らかの良いことがあったと思います。映画って最悪の現場でも良い映画になったり、逆に和気あいあいとしている現場でつまらない映画になったりもするので、そういうことも含めて教育的な場だったのではないかという気がします。ドキュメンタリーでは、ほいほい答えてくれる相手とうまく行ったなと思っていると、お釈迦様の手の平で転がされていたなんてこともあるし、取材拒否にあったり、喋らないところに真実があったり、難しいところですよね。

土田：日本で実施した際には井口奈己監督やエドウィン監督を迎えて映画鑑賞のワークショップをやりましたよね。日本には鑑賞の映画教育がないと言われてますが、東南アジアは日本以上に足りないと思いました。アメリカなどの大学ではスクリーニングが単位として決められていたり、日本でも是枝（裕和）さんや諏訪（敦彦）さんなど作り手側も意識して授業に取り入れていますが、それでも学生たちの観る量が足りないで、「作ること」と「観ること」の接続が課題であることは、協議会をはじめとして映画を教える教員により共有されるべきだと思います。

渡部：AFI（アメリカン・フィルム・インスティテュート）は毎週

決まって金曜日に鑑賞をやっていて、外部の人も無料で観られるから家族連れで来る人もいて、ちゃんとヌーヴェルバーグの説明なども入ります。学生も皆楽しみにしていましたし、制作の途中でも夜は鑑賞に行っていました。

土田：映画を観て実際に言葉にしていく作業は作るために不可欠だし、漠然と見ることは違う頭の使い方をしているので、ワークショップでやった時は学生も楽しんでいると思いました。

石坂：フィリピンで実施した翌年は日本で制作をやりました。日本開催のやりやすさとやりにくさがあったかと思いますが、どうでした？

土田：あの年は（全体の）引受校がなかったのも、渡部先生と武蔵野美術大学の小口詩子先生に急いで準備をしていただいた指導に入ってくださいましたが、厳密に何をどこまで行うのか、誰がどれだけの指導を受け持つのかという責任の所在が曖昧でした。ポスプロは映画大学が受入となり、夜遅くまでケアしてくれました。期間を通して、現場を管理するだけでなく、演出や技術面でも少し内容についてこまめにアドバイスする人がいれば、ひとつの大学に依存する必要はないと思いますが、やっぱりこの長い期間を1、2人の先生が見るのは難しい。

石坂：ベースキャンプをきちんと作るというのは課題ですね。ただ一定期間、大学が場所を提供することには全学的な協力態勢が必要なので、他の予定が入っていたりすると、お断りせざるを得ないことも。結局、何名の学生が参加しているとか、学校にとってのメリットは何なのかという話になると、うまく答えられない。でも国際交流なんてそんなものですから。

渡部：そういう意味では、フィリピンの時は大学の敷地が一つの街になっていて、その中であれば安全に撮影ができるという面白い環境でした。日本にはそんな学校ないですね（笑）。



土田：2年目に国際交流基金のインターンの学生たちが各班の通訳やアテンドをしてくださいましたが、今後、国際交流や外国語を勉強している学生にも参加してもらい、大学に施設面で協力をお願いする可能性はありますよね。

石坂: 今後、国際交流的にやるのか映画交流的にやるのか。東南アジアのプロデューサー、特に女性プロデューサーは学生と同じ位の年齢でバリバリやっていて、交渉力がすごいです。日本の場合、プロの世界でもやはり一番不足しているのは国際的にやり取りできるプロデューサーですが、そのハンドを言葉のスペシャリストが入って若いチームで乗り越えていくというのはありかもしれません。2年目はその雛形みたいが出来ていましたね。

土田: ただし、日本の場合、国際関係や国際交流を看板に掲げる学部の中で、語学に優秀で映画が好きだという学生がいたり、映画を通して外国を学ぶ授業はあるけれど、それは映画を使って何かをするという発想であって、映画そのものへ向かうわけではないんですね。プロデュースをしたいという人はいっぱいいるけど、そういう人たちと実際に現場でものを作っている人たちの相性があまり良くないとも思っています。ものを作る人は言葉を磨いて、企画をプロデュースする人はまず映画が好きになって…そういう風にやれる人が出てきたらいいなという至極真っ当なことをみな思っています。

石坂: 渡部先生も講師として釜山アジア・フィルムアカデミーで教えられていましたが、2年前には釜山アジア・フィルムスクールというプロデューサー養成の学校も設立されました。ここでは各国から学生や講師を集めて全部英語で指導を行います。シナリオの書き方は各国独自のスタイルがありますが、プロデューサーの養成はグローバルなものなので、今後基金がイニシアチブを取るならそういう講座的なものが出来たら良いですね。

土田: アジアの今後を見据えて、文化事業を日本と「外」との間で展開できるプロデューサー育成のための機関、コンソーシアム的なものでしょうか。既存のものは大企業の論理になりがちなので、そうではなくやはり映画の文化にきちんと根ざしたものをやるのが良いと思いますし、基金のような組織が音頭を取って、学校を卒業した人たちがもう一回勉強する機会が出来るとありがたいのではないかと思います。日本には国際的な視点を持ったプロデューサーや、脚本を読めるプロデューサーがいないというのは自分が学生の頃から言われていますが、状況はあまり変わっていません。また海外で映画の勉強をしてきても、日本には短編のマーケットがないし映画の仕事のルートが絶たれるケースが多い。そういう意味で、ポーランドで勉強してきた石川慶監督は珍しいケースですが。

石坂: それは大学だけでなく産業的にも人の育て方として国

際的な視点をあまり求めていないからで、それが変わらないと難しいですね。是枝監督が日本版を総合監修した「十年」国際プロジェクト（香港、日本、タイ、台湾で製作）は若手監督が短編を共作して繋いだものですが、次の段階はそういうものも考えられるかもしれませんが。他方、映画大学にアジア圏からくる問い合わせの中で一番多いのはシナリオの作り方。東南アジアでは短編映画が花盛りですが、どこも短編のシナリオから長編に開発する力が弱いので、そこで日本の力を借りたいと。かなり専門的になってしまいますが、シナリオのワークショップは東南アジア側からのニーズが高いかもしれません。そこまで特定せず、映画をツールにして皆仲良くみたいな事だと、次に何が考えられるでしょう。



土田: 早稲田では是枝さんで行っている授業では1年かけて映画を作りますが、半年間はひたすらプレゼンテーションを続けます。やはり、映画を作るにはただ単に自分の思いをそのまま伝えるだけでは駄目で、どのように論理的に人を説得して、映画として面白くするには何を具体的に脚本へ落とし込むべきなのか、考え抜く必要があります。仮に、成果物としての作品ができなかったとしても、プロフェッショナルではない学生時代においては、そのことの方が大切であるような気がします。

このプログラムに限らずいまは過渡期だと思いますが、今後、東南アジアをフィールドとして垣根を意識せずに映画を作るというケースは、増えていくと思います。実際、林君や吉田大樹君（映画大学）みたいに複数回参加した人もいますよね。彼らが10年後位にディレクターになったり、テレビや報道で企画や番組を任せてもらえるようになったときに、ようやく積み重ねてきたネットワークや経験が生きてくるのではないのでしょうか。東南アジアでは特に若手監督デビューは早いですが、国内の映画界のみにこだわるよりも、映画制作に携わるチャンスは多いはず。彼らも他人を見て負けちゃいけないと、頑張ろうと一番強く感じる年頃なので、何らかのかたちで、これまで参加してきたメンバーを集める機会が定期的にあると良いのではないかと考えています。



...and Action! Asia
Participants



1

- 【日本映画大学】安藤昇児、内田淳、木附功章、近藤希実、竹牟禮綾乃、泰山匠、原口大輝／石坂健治、土田 環（教員）
- 【ジャカルタ芸術大学】Asaf Kharisma Putra Utama, Julita Pratiwi, Sabila Nurbayani Seno Gumira Adjidharma（教員）
- 【シラバコーン大学】Sattaya Janchana, Soraya Chiewchanchai, Suwanun Pohgudsai / Sasawat Boonsri（教員）
- 【フィリピン大学フィルム・インスティテュート】Antonne Rafael Carbonell Santiago, Maria Margarita Villegas Mina, Rod-Michael Parreja Tumbaga / Roehl Laquindanum Jamon（教員）
- 【共同企画・運営】石坂健治、土田 環



2

【日本映画大学】植田朱里、林賢二、丸山朔太郎、吉田大樹、米澤春樹／石坂健治、土田環、安岡卓治（教員）
 【ジャカルタ芸術大学】Ella Putri Maning, Erina Adeline Tandian, Julius Pandu Pratama Hijrianto / Bambang Supriadi（教員）【シラパコーン大学】Khemruji Teerakawong, Pathompong Praesomboon, Siripat Nomruk / Sasawat Boonsri（教員）【フィリピン大学フィルム・インスティテュート】Daniel Sunga Saniana, Jan Andrei Bandilla Cobey, Mariah Christelle Feliciano Reodica / Sari Raissa Lluch Dalena（教員）
 【ホーチミン映画演劇大学】Ho Cat Nguyen, Nguyen Dieu Huyen, Nguyen Quoc Viet / Nguyen Trung Phan（教員）
 【ヤンゴン国立芸術文化大学】Htun Tauk Moe Thu, Ko Ko Maung, Wadi Thet Htut / Khin Htwe Nge（教員）
 【インターン】上田真衣、栗田秀美、吉田朱里（早稲田大学）、Camilia Salsabilla、末次皐月（立命館アジア太平洋大学）
 【共同企画・運営】石坂健治、土田環、安岡卓治、島田隆一



4

【神戸芸術工科大学】東山音々【日本映画大学】金明充、吉田大樹【東北芸術工科大学】佐々木茜【武蔵野美術大学】芦澤麻有子、廣瀬萌恵里、藤本匠【早稲田大学】草間諒太、堀川恭平【映画人材開発センター：TPD】Nguyen Diep Thuy Anh, Nguyen Le Hoang Viet, Tran Huu Thanh / Do Quoc Trung（教員）【スアン スナンダ ラーチャバット大学】Jirakan Sakunee, Sarun Kositsukjaroen, Witchayoot Ponpraserd / Teerapong Serisamran（教員）
 【マレーシアサラワク大学】Kasmirul Iqmal Bin Noruden, Herald Nyumbang Anak Nyulim, Syahnur Asyikin Kee Charles / Yow Chong Lee（教員）【ラオス国立美術大学】Phoutthanome Keopaseuth, Xayaveth Keovilay, Wravong Phrachanh / Souliya Phoumivong（教員）
 【共同企画・運営】石坂健治、小口詩子、土田環、渡部真、三澤拓哉

3



【フィリピン大学フィルム・インスティテュート】Brainard Bill Barrinuevo, Katrina May B. Banaag, Lorenzo Miguel B. Hilario / Sari Raissa Lluch Dalena（教員）【アテネオ・デ・マニラ大学】John Peter Cadiz Chua / Jose Angelo D. Supangco（教員）【デ・ラ・サール聖ベニルド校】Alphonzo Climaco Alegro, Gilan Paolo P. Ilagan, Katrina Ysabel Puzon Villarosa / Kay Donato（教員）【ジョグジャ・フィルム・アカデミー】Egha Muhammad Harismina, Evan Secunda, Herry Setyadi / Yusmita Akhirul Latif（教員）【バンコク大学】Atthawut Intagoon, Supakit Sonsee, Tin Chanabangkaew / Nuntanat Duangtisarn（教員）【マレーシアサラワク大学】Anthony Salen Ngau, Nehemiah Yap Jia Sheng, Nur Ikmar Bin Sarbini / Yow Chong Lee（教員）【日本映画大学】林賢二【東北芸術工科大学】福田健人【早稲田大学】石井光一郎【名古屋学芸大学】渡部真（教員）【武蔵野美術大学】小口詩子（教員）
 【共同企画・運営】Sari Raissa Lluch Dalena, Icho Pascual, Elaine Alvarez, Maricris F. Madara
 【協力】Jose Angelo D. Supangco, Kay Donato

5



【ジャカルタ芸術大学】Achmad Abdul Toyib, Bagaditya Ganetha, Fadhilah Khairani, Herry Bhaskara, Luqman Hakim, M. Farhan Ananda, Paula Nanlohy, Putri Ahimsa Ibrahim / Devina Sofiyanti, Ali Musthafa Khairi, Ignasius Loyola, Arly Yanatri Zainsty（教員）【フィリピン大学フィルム・インスティテュート】John Aaron Alcaraz Alsol, Kervin Angelo Astilla Quieta, Sophia Marie Racelis Isip / Bryan Taon Quesada（教員）
 【映画人材開発センター：TPD】Ho Thanh Thao, Nguyen Duy Thanh, Tran Thanh Van / Do Quoc Trung（教員）
 【ヤンゴン国立芸術文化大学】Hein Thura, Htet Zin Thein, Myo Thar Khin / Khin Htwe Nge（教員）
 【東北芸術工科大学】川崎たろう【日本映画大学】尾崎優一【武蔵野美術大学】小池美稀、廣瀬萌恵里 / 小口詩子（教員）
 【ボランティア】Carine Nabila, Eileena Julinda Lyana, Mario Ewansya, Muhammad Abdillah Farhan
 【共同企画・運営】Suryana Paramita, Suzen HR. Tobing

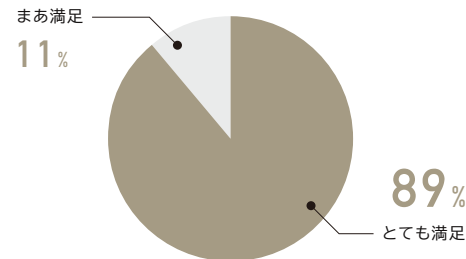
QUESTIONNAIRE

参加者アンケート結果

実施時期：2016年-2019年（#02-#05）※各年プログラム参加者を対象に実施

回答数：94件（日本：20、東南アジア：74）

Q. 「...and Action! Asia」に参加していかがでしたか？



Q. 共同制作の過程の中で最も困難だったことは何ですか？

「各国で企画に対するモチベーションが異なり、そこをどう引き上げるかがかなり大変だった」（#02参加/日本）

「物語に関するディスカッションで、複数のメンバーがオリジナル脚本のストーリーが弱いと感じたためスクリプトに対立を生み、物語にどう深みを持たせるかという話に時間を要した」（#03参加/マレーシア）

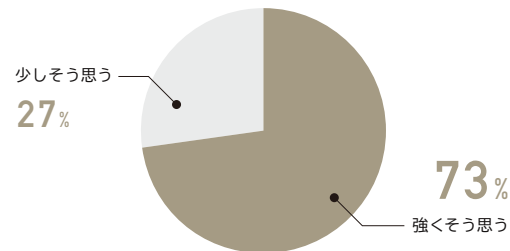
「立場の多様性が裏目に出て編集の場で皆が折れないことがあり難航した。非常に感覚的な部分を話す機会も多く、コミュニケーションに難点を感じた」（#03参加/日本）

「“時間”。特に日本人は時間の使い方に集中するので。沢山のエネルギーを消費したが、同時に一層自分の役割責任を全うしようと思った」（#04参加/タイ）

「自身の考えていることと、他人の考えていることを互いに正しく理解すること、主に情報共有が最も難しい点だと感じました。今後も付いて回る課題だと考えている」（#04参加/日本）

「特に対象についてよく知らないといけなドキュメンタリーの制作だったので、時間制限が挑戦でした。準備期間ではオンラインでチームと会いましたが、実際に会って友情を育む事とは全く違うものだった」（#05参加/フィリピン）

Q. 他のアジアの国・地域の文化や考え方に対する理解は深まりましたか？



Q. 共同制作の過程の中で最も有益だったことは何ですか？

「他の学生との間で多くの調整やプレストが必要とされ、多くの困難もあったけど、言葉の壁を壊すことこそ大事な目的であったと考える。視覚に訴えるメディアである映画が世界言語であることを証明していた」（#02参加/フィリピン）

「異文化の学生と共にものを作れたこと。日本の学生映画は感覚的に作っているものも多いが、その点他の国の学生は「なぜ」を大切にしており、その感覚はとても大切だと感じた。彼らの情熱が自分の次への活力となった」（#03参加/日本）

「脚本を練り上げていくプロセスがとても面白かった。各国の宗教的な背景や消化してきた映画文化の違いから様々な議論が喚起され、とても有意義な議論が出来た」（#03参加/日本）

「最高だったのは、皆で問題を解決できたとき。自己中心になることはできないし、英語できちんと伝えなくてはいけない。そのような経験を通して成長することができた。プレゼンテーションでは大勢の人前で話さなくてはならなかったが、おかげで自信がついた」（#03参加/インドネシア）

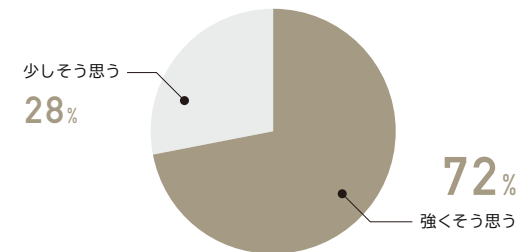
「ただ皆と映画について話すことを通じて色々なことを学んだし、映画に対する自分の視野を広げてくれた。このプログラムは、自分のアイデンティティをも成長させてくれた」（#03/マレーシア）

「短期間だからこそ生まれるものがあり、即決力や俊敏な判断力、協調性を養うことが出来た」（#04参加/日本）

「英語ができなくても話すという勇気を持つことができた。日本人同士の交流ではなかなか味わえない温かさやテンションを感じ、勉強になった」（#04参加/日本）

「構成を磨くために事前にオンラインで企画ディスカッション出来たこと。離れていてもコミュニケーションを図れたのが良かった」（#05参加/インドネシア）

Q. 他のアジアの国・地域の人々とのネットワークを深めることはできましたか？



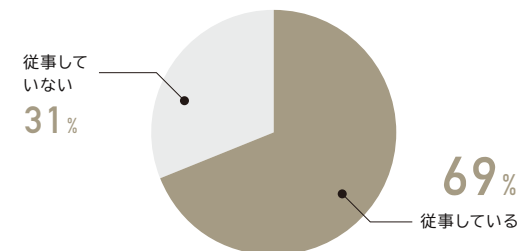
フォローアップアンケート

実施時期：2018年6月11日～7月31日 ※#01-#04全参加者を対象にオンライン実施

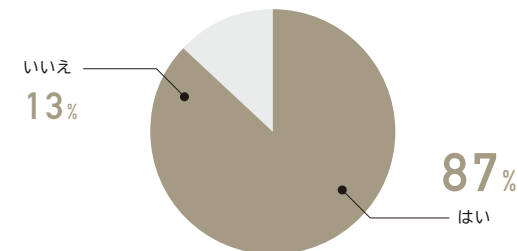
回答数：44件（日本（J）：11、東南アジア（SEA）：33）

Q. 映画・映像関係の仕事への従事状況 （大学卒業生対象）

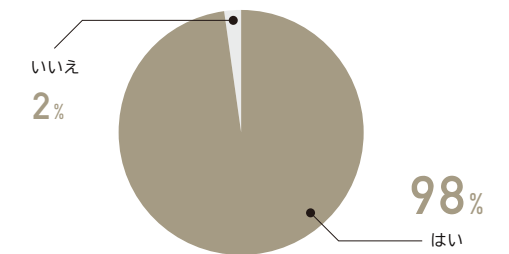
※従事している18名のうちフリーランス13名（J:1,SEA:12）、会社員5名（J:4,SEA:1）



Q. 本プログラムの他の参加者・参加校との交流は続いていますか？



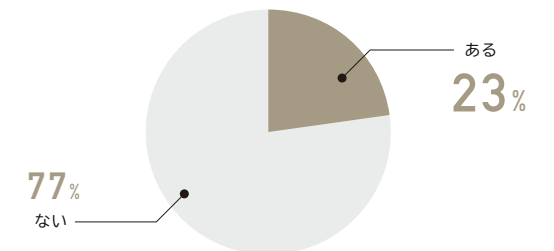
Q. 将来的な国際共同制作や国際協働に興味はありますか？



「このプログラムを通して、自分の文化とさほどかけ離れていない色々な文化から生まれる興味深い視点や洞察力に沢山触れることができた。他のアジアの映画制作者との協働を通して、このコミュニティ感覚や我々が共通して持つ個人的な視点を持った映画を作るための理解をぜひ生かしていきたい」（#02参加/フィリピン）

「いまやプログラムを共にした仲間は互いの好みや長所短所も理解した仲間。SNS等を通じてお互いの過去の作品を見せ合ったり、現在進行中のプロジェクトなどについて報告し合っている。共通のビジョンを持つ仲間とさらに腰を据えた映像制作に取り組んでみたい」（#03参加/日本）

Q. プログラム参加以降、他国の制作者と一緒に取り組んだ作品・企画の有無



例) 福岡フィルム・フォーラム（『ナギョンとキヌカワ』）
『海を駆ける』（深田晃司監督）制作アシスタント
Thailand International Film Destination Festival 短編映画制作ほか

国際交流基金アジアセンター



独立行政法人国際交流基金(ジャパンファウンデーション)は、全世界を対象に総合的に国際文化交流事業を実施する日本で唯一の専門機関です。アジアセンターは2014年4月に設置され、ASEAN諸国を中心としたアジアの人々との双方向の交流事業を実施・支援しています。日本語教育、芸術・文化、スポーツ、市民交流、知的交流等さまざまな分野での交流や協働を通して、アジアにともに生きる隣人としての共感や共生の意識を育むことを目指しています。

<https://jfac.jp>

…and Action! Asia
—映画・映像専攻学生交流プログラム— 報告書

編集・翻訳 国際交流基金アジアセンター (掛谷泉、滝本亜魅力)
デザイン 西林和美
発行 国際交流基金アジアセンター
160-0004 東京都新宿区四谷 4-16-3
2019年7月3日発行

